

# 仁江戸古墳群

主要地方道つくば古河線歩道新設  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28年3月

茨城県常総工事事務所  
公益財団法人茨城県教育財団

にえどこふんぐん  
仁江戸古墳群

主要地方道つくば古河線歩道新設  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28年3月

茨城県常総工事事務所  
公益財団法人茨城県教育財団

## 序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者からの委託を受けて、埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県常総工事事務所による主要地方道つくば古河線歩道新設工事に伴って実施した、茨城県結城郡八千代町仁江戸古墳群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、古墳の盛土や周溝の状況を確認でき、古墳の規模や構築状況が明らかとなりました。これらの成果は、当地域の社会の成り立ちや歴史を知る上で欠くことのできない貴重な資料となることと思います。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県常総工事事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、八千代町教育委員会はじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木欣一

## 例　　言

- 1 本書は、茨城県常総工事事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成 24 年 10 月 1 日から 11 月 30 日まで発掘調査を実施した、茨城県結城市八千代町大字仁江戸字中 1364 番 3 ほかに所在する仁江戸古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
　　調査 平成 24 年 10 月 1 日～11 月 30 日  
　　整理 平成 27 年 4 月 9 日～5 月 31 日
- 3 発掘調査は、調査課長樺村宣行のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長	皆川 修
次席調査員	駒澤悦郎
調査員（主任）	長洲正博
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、調査員海老澤稔が担当した。
- 5 墳丘盛土とその直下の旧表土および周溝覆土層から採取した土壤の火山灰分析については、パリノ・サーゲイ株式会社に委託し、分析結果及び考察は、付章として巻末に掲載した。

## 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = + 17,600 m, Y = + 9,240 mの交点を基準点(A 1a1)とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C … , 西から東へ 1, 2, 3 … とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j, 西から東へ 1, 2, 3, … 0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SD - 溝跡 SK - 土坑 TM - 古墳

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器

土層 K - 撥乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1, 各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 繊維土器断面  煤

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は( )を、推定値は[ ]を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 古墳時代の遺構と遺物	11
古墳	11
2 江戸時代の遺構と遺物	15
(1) 土坑	15
(2) 溝跡	17
3 その他の遺構と遺物	20
(1) 土坑	20
(2) 溝跡	21
(3) 遺構外出土遺物	23
第4節 まとめ	28
付 章	31
写真図版	PL 1 ~ 4
抄 錄	

# にえどこふんぐん 仁江戸古墳群の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

仁江戸古墳群は、八千代町の南東端部、鬼怒川右岸の標高 21 ~ 26 m の台地上に立地しています。今回の調査は、主要地方道つくば古河線歩道新設工事に伴って失われる古墳の内容を図や写真に記録して保存するため、平成 24 年 10 月から 11 月までの 2 か月間、茨城県教育財団が実施しました。



## 調査の内容

調査では、古墳 1 基のほか、江戸時代の土坑 1 基、溝跡 3 条などが確認できました。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（高坏）、須恵器（是う）、土師質土器（焙烙）、陶器（碗・皿・灯明受皿・鉢・徳利）、磁器（碗・皿・徳利）、土製品（土玉）、石器（石臼・礎石）、錢貨、鉄製品（不明）などです。



墳丘盛土の状況



墳丘の確認状況



墳丘の土層断面



西側周溝の調査風景



東側周溝の土層断面

### 調査の成果

当古墳の周溝は7～10mの幅をもち、逆台形状に巡ることが確認されました。盛土の状況からは、周溝を掘りながら墳丘を造っている工程が明らかとなりました。このことから、当古墳は、約150m東に位置している当古墳群で最大規模の香取神社古墳と同じ向きで、前方部が北側に位置する前方後円墳の可能性があります。大きさは、主軸内縁で45mほどと推定され、当古墳群の中で中心的な古墳の一つと考えられます。造られた時期は、埴輪を伴わないことや出土した土器などから、5世紀後葉墳と考えられます。

また、表土などから、たくさんの陶磁器片や銭貨などが出土しました。これらは、江戸時代後期から昭和にかけてのものです。江戸時代後期には当古墳の大部分は削平され、それ以降、塚として地域の信仰対象となっていたと思われます。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成21年12月1日、茨城県常総工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、主要地方道つくば古河線歩道新設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成22年8月25日に現地踏査を実施し、発掘調査をする古墳の存在を確認した。

平成24年3月14日、茨城県常総工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。これを受けた茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成24年3月19日、茨城県常総工事事務所長あてに工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成24年3月22日、茨城県常総工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに主要地方道つくば古河線歩道新設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成24年3月23日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県常総工事事務所長あてに、仁江戸古墳群について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県常総工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成24年10月1日から11月30日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

仁江戸古墳群の当報告書に係る調査は、平成24年10月1日から11月30日まで実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 期間	10月		11月	
調査準備 表土除去 遺構確認				
遺構調査				
遺物洗浄 注写真整理				
撤収				

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

仁江戸古墳群は、茨城県結城市八千代町大字仁江戸字中1364番3ほかに所在している。

八千代町は、関東平野のほぼ中央に位置し、茨城県の南西部に当たる。八千代町と下妻市の境には、延長176.7kmの鬼怒川が南に流れ、当地域は鬼怒川中流域に当たる。地形は鬼怒川を東限とし、栃木県から南にのびる結城台地と鬼怒川右岸の沖積地に大きく二分することができる。結城台地は八千代町付近では、北西から南東に向かって標高が下がっている。沖積地は大きく見ると下妻台地と結城台地に挟まれた「鬼怒川低地」と「飯沼川低地」に分けられ、鬼怒川両岸には自然堤防が形成されている。鬼怒川は古くから氾濫を繰り返し、その流路を変え、現在に至っている。

仁江戸古墳群は、八千代町の南東端部に位置し、鬼怒川右岸台地上に立地する。現在の鬼怒川は、台地のすぐ東側を流れているが、これは、近代の河川改修によるもので、明治期の旧地形図をみると台地から遠ざかるように東へ蛇行していたことが分かる。当古墳群の立地する台地は、畠地、宅地、山林などに利用されており、北側に広大な鬼怒川低地、南側に旧別府沼、さらに北西方向に入り込んだ谷津によって囲まれている。当古墳群は、北西から南東方向に細長く伸びた台地の北側に沿って、鬼怒川低地を望む位置に分布し、標高は21~26mである。

### 第2節 歴史的環境

仁江戸古墳群周辺の鬼怒川中流域の台地上や低地からは、旧石器時代から中・近世まで多くの遺跡が確認されている。ここでは、古墳時代までの遺跡について概観する。

旧石器時代の遺跡では、当古墳群の位置する台地上の本田屋敷遺跡<sup>1)</sup>(58)が調査され、黒曜石製の細石刃核や縦長剥片などが出土している。また、当古墳群が立地する台地と谷津を隔てた南側の台地上に位置する一本木遺跡<sup>2)</sup>(53)では、頁岩製や安山岩製のナイフ形石器などが、氏神A遺跡<sup>3)</sup>(50)では、黒曜石製の細石刃核が、皆葉遺跡<sup>4)</sup>(16)では、頁岩製の縦長剥片がそれぞれ出土している。一本木遺跡の北西に隣接する西原遺跡<sup>5)</sup>(52)では、局部磨製石斧再生剥片、楔形石器、削器などが出土している。鬼怒川左岸では、野方台遺跡<sup>6)</sup>(83)で、ナイフ形石器、彫刻刀、縦長剥片、柳葉形尖頭器などが出土している。

縄文時代の遺跡は、鬼怒川やその支谷を臨む台地上に確認されている。当古墳群の位置する台地上には、仁江戸東遺跡(4)、仁江戸西遺跡(2)、仁江戸南遺跡<sup>7)</sup>(7)、柴崎遺跡(55)が分布し、前期から中期にかけての遺物が採集されている。本田屋敷遺跡では、後期初頭の土坑や後期の遺物包含層などが確認され、中期から晩期の遺物が多量に出土している。谷津を隔てた南側の台地上の仲道遺跡<sup>8)</sup>(59)では、中期末葉の土坑が確認されている。一本木遺跡では、後期前葉の竪穴建物跡が、岡本遺跡<sup>9)</sup>(54)では、前期の繊維土器がそれぞれ確認されている。西原遺跡では、谷津に沿うように、一定の間隔を保ちながら28基の陥し穴が確認されている。陥し穴は約120mにわたって直線上に並んでいる。時期は中期末葉で、當時、集団で獵を行っていたことがうかがえる。鬼怒川対岸の野方台遺跡や野方台南遺跡<sup>10)</sup>では、土坑や遺物包含層などが確認され、前期の繊維土器や中期の土器などが出土している。

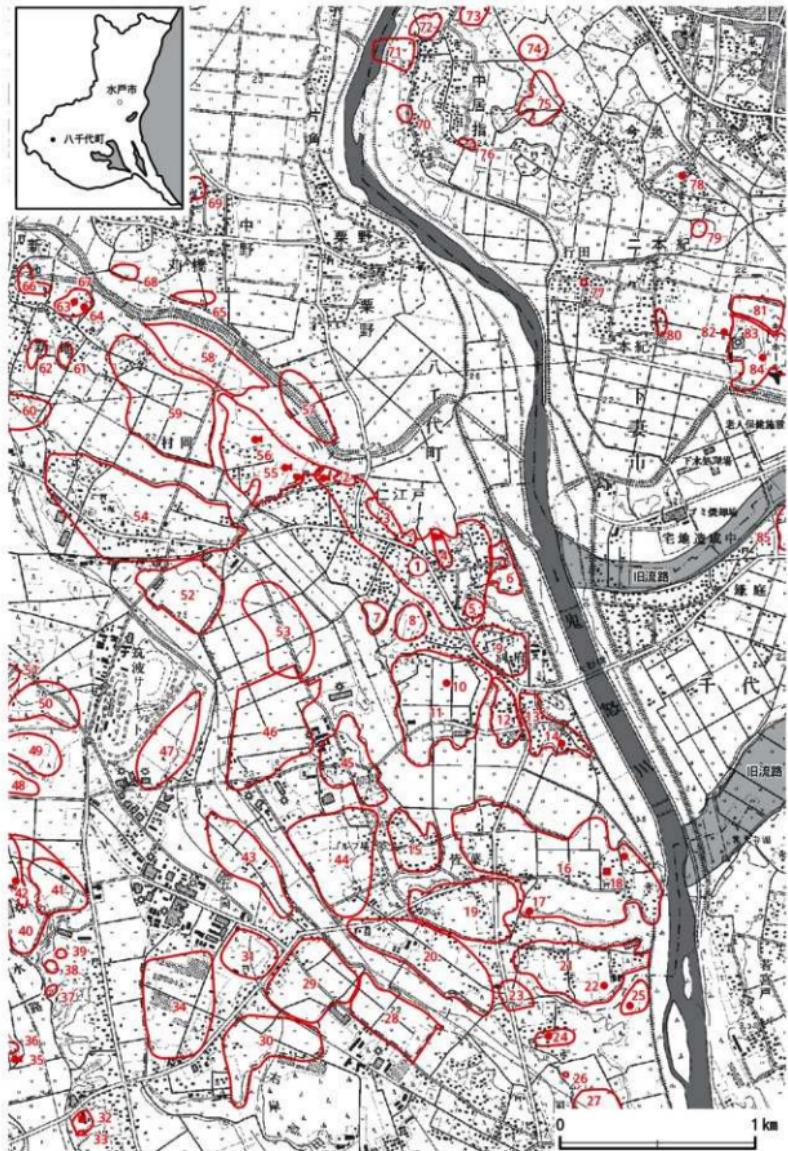
弥生時代の遺跡は、当古墳周辺では、あまり確認されていない。当古墳の位置する台地上では、仁江戸南遺跡で、後期後半の二軒屋式土器が採集されている。そのほか、一本木遺跡、仲道遺跡、氏神C遺跡（49）、柴野遺跡（44）、皆葉東山遺跡（15）で土器片が採集されている。

古墳時代の遺跡は、当古墳群周辺に数多く確認されている。松合遺跡（5）で前期の土器が、仁江戸東遺跡で後期の土器が出土している。当古墳群に接して南東に位置する別府遺跡<sup>11)</sup>では、前期の良好な資料が採集されている。発掘調査が行われた本田屋敷遺跡では前期の土坑が、一本木遺跡では、前期の堅穴建物跡や方形周溝墓が、西原遺跡や鎌庭木仙房A遺跡<sup>12)</sup>（47）では、中期の堅穴建物跡などが確認されている。これらの遺跡は、当古墳群と関連する集落跡と考えられている。鬼怒川左岸の野町台遺跡では、古墳時代の堅穴建物跡が100軒以上確認され、特に前期の堅穴建物跡からは、東海地方の土器が多量に出土し、注目されている。当古墳群は、現在2基の前方後円墳と19基の円墳の計21基が確認されている。これらの古墳は、仁江戸の集落内に広く分布する東側の地域と、山林内に密集する西側の地域の大きく2つの支群に分けることができる。また、当古墳群に隣接する下妻市の柴崎古墳群（56）は、墳形などから4世紀後葉に造られたと考えられる全長65mと55mの2基の前方後円墳から成っている。当古墳群中、最大の古墳は香取神社古墳<sup>13)</sup>（1号墳）で、全長70mの前方後円墳である。鬼怒川中流域では最大級の古墳で、墳形や埴輪福部から採集された壺形埴輪片などから、5世紀前葉に比定されている。7号墳<sup>14)</sup>は、平成9・12年度に調査が行われ、外周外縁で、径48mの円墳と推定されている。粘土床の上に木棺を置いた埋葬施設から鉄刀や鉄鏃が出土し、周溝から形象埴輪片や円筒埴輪片が出土している。5世紀末から6世紀初頭に位置付けられている。このように、当古墳群（柴崎古墳群を含む）は、前方後円墳4基と円墳19基から成る4～6世紀にかけての鬼怒川中流域最大級の古墳群である。

\* 文中の（ ）内の番号は、第1図及び表1の当該番号と同じである。

註

- 1) 伊藤玄三・田部秀男・石川太郎ほか「村岡遺跡群 本田屋敷遺跡 仲道遺跡 岡本遺跡」『千代川村埋蔵文化財発掘調査報告書』第4集 1998年3月
- 2) 藤原均『一本木遺跡』『八千代町埋蔵文化財調査報告書』6 1997年3月
- 3) 小川和博 大沢淳志ほか「氏神A遺跡」『八千代町埋蔵文化財調査報告書』7 1998年3月
- 4) 赤井博之 小川和博 大沢淳志「皆葉遺跡」『千代川村埋蔵文化財発掘調査報告書』第9集 2003年3月
- 5) 赤井博之 小川和博 大沢淳志 石川太郎「西原遺跡」『千代川村埋蔵文化財発掘調査報告書』第6集 2000年3月
- 6) 千代川村史編さん委員会「村史 千代川村生活史 第三巻 前近代資料」2001年3月
- 7) 八千代町史編さん委員会「八千代町史(資料編I)考古」1988年3月
- 8) 註1) に同じ
- 9) 註1) に同じ
- 10) 註6) に同じ
- 11) 岩崎卓也 西野元 滝沢誠ほか「古墳測量調査報告書I」『筑波大学先史学・考古学研究調査報告』5 1991年3月
- 12) 赤井博之 小川和博 大沢淳志「鎌庭木仙房A遺跡」『千代川村埋蔵文化財発掘調査報告書』第7集 2001年3月
- 13) 註11) に同じ
- 14) 山野井哲夫 小川和博 大沢淳志「仁江戸7号墳」『八千代町埋蔵文化財調査報告書』9 2002年3月



第1図 仁江戸古墳群周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「石下」「下妻」）

表1 仁江戸古墳群周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
①	仁江戸古墳群			○				44	柴野遺跡	○	○	○	○	○	○
2	仁江戸西遺跡	○						45	山神前遺跡	○		○	○	○	○
3	仁江戸中遺跡				○			46	山神西遺跡	○		○	○	○	
4	仁江戸東遺跡	○	○	○	○	○		47	鎌庭木仙房A遺跡	○	○	○	○	○	○
5	松合遺跡			○				48	氏神D遺跡						○
6	内田向遺跡			○	○		○	49	氏神C遺跡	○	○	○	○	○	
7	仁江戸南遺跡	○	○		○	○		50	氏神A遺跡	○	○		○	○	
8	西新田遺跡	○			○	○		51	氏神B遺跡			○	○	○	○
9	中台遺跡	○		○	○	○		52	西原遺跡	○	○	○	○	○	○
10	諏訪前古墳			○	○	○		53	一本木遺跡	○	○	○	○	○	
11	諏訪前遺跡	○		○	○	○		54	岡本遺跡	○		○	○	○	○
12	合ノ田遺跡	○		○	○	○		55	柴崎遺跡	○	○	○	○	○	○
13	稻荷下遺跡	○	○	○	○	○		56	柴崎古墳群						
14	稻荷山古墳			○		○		57	江崎遺跡		○	○	○	○	
15	皆葉東山遺跡	○	○	○	○	○		58	本田屋敷遺跡	○	○	○	○	○	○
16	皆葉遺跡	○	○	○	○	○		59	仲道遺跡	○	○	○	○	○	○
17	富塚古墳			○				60	沼尻遺跡	○		○	○	○	
18	川端古墳群			○				61	宿南遺跡					○	
19	新地遺跡	○		○	○			62	前原遺跡					○	
20	五箇境遺跡	○		○	○	○		63	宿北古墳				○		
21	遠山遺跡	○		○	○	○		64	宿古墳				○		
22	遠山古墳				○			65	宮崎遺跡				○	○	
23	中儀遺跡	○		○	○			66	峰山遺跡	○					
24	北原遺跡	○		○				67	宿北遺跡	○		○			
25	東山塚古墳			○				68	在家遺跡			○	○		
26	觀音前遺跡	○		○		○		69	薬師遺跡			○	○	○	
27	本屋敷遺跡	○	○	○	○			70	馬場坪遺跡			○	○		
28	五箇東山遺跡	○	○	○	○	○		71	中居指遺跡	○		○			
29	折元遺跡	○		○	○	○		72	北浦遺跡	○		○	○	○	
30	前山遺跡	○		○	○			73	白鳥西遺跡	○		○	○		
31	須賀遺跡	○		○	○			74	白鳥北遺跡	○		○	○	○	
32	陣屋古墳群			○				75	白鳥南遺跡	○		○	○	○	
33	陣屋塙輪窯跡			○		○		76	琵琶島遺跡					○	
34	西山遺跡	○		○	○			77	行田遺跡				○		
35	秋葉山古墳			○				78	諏訪台古墳			○			
36	尾崎前山遺跡	○	○	○		○		79	広岡遺跡	○		○	○		
37	屋敷尻遺跡	○						80	松岡前遺跡			○	○		
38	天神後遺跡			○				81	申内遺跡			○	○	○	
39	屋敷遺跡			○				82	松岡古墳				○		
40	矢尻A遺跡	○	○	○	○	○		83	野方台遺跡	○	○	○	○	○	○
41	矢尻B遺跡	○	○	○	○	○		84	野方古墳群				○		
42	城山古墳群			○		○		85	北袋遺跡			○	○	○	
43	鎌庭木仙房B遺跡	○	○	○	○	○									



第2図 仁江戸古墳群調査区設定図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

仁江戸古墳群は、茨城県結城郡八千代町の南東端部に位置し、鬼怒川右岸の標高21～26mの台地縁辺部に立地している。調査面積は322m<sup>2</sup>で、調査前の現況は畠地である。

調査の結果、古墳1基、江戸時代の土坑1基、溝跡3条、時期不明の土坑1基、溝跡2条を確認した。

遺物は遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に4箱出土している。主な遺物は縄文土器(深鉢)、土師器(高杯)、須恵器(盤)、土師質土器(焰焰)、陶器(碗・皿・灯明受皿・鉢・徳利)、磁器(碗・皿・徳利)、土製品(土玉)、石器(石臼・礎石)、錢貨、鐵製品(不明)などである。

### 第2節 基本層序

調査区の中央部(A211区)の墳丘下にテストピットを設定し、第3図に示すような土層堆積の状況を確認した。土層は14層に分層された。土層の観察結果は以下のとおりである。

第1層は、黒褐色を呈する旧表土層である。ローム粒子を微量含み、粘性・綿まりとともに普通で、層厚は10～15cmである。

第2層は、暗褐色を呈する旧表土層である。ローム粒子を少量含み、粘性・綿まりとともに普通で、層厚は15～25cmである。

第3層は、黒褐色を呈するソフトローム層への漸移層である。ローム粒子を微量含み、粘性・綿まりとともに普通で、層厚は18～24cmである。

第4層は、暗褐色を呈する第3層とともにソフトローム層への漸移層である。粘性・綿まりとともに普通で、層厚は10～18cmである。

第5層は、褐色を呈するソフトローム層である。

黒色スコリアを多く含み、粘性は強く綿まりは弱く、層厚は10～15cmである。

第6層は、褐色を呈するソフトローム層である。

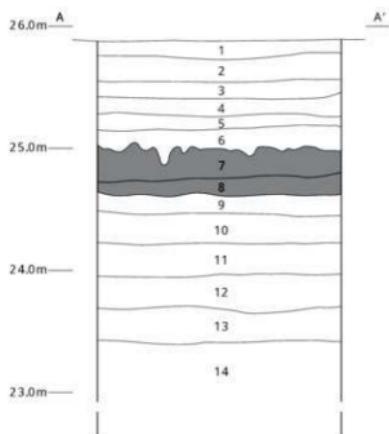
黒色スコリアを多く含み、粘性・綿まりとともに強く、層厚は5～30cmである。

第7層は、暗褐色を呈するハードローム層である。

粘性は強く、綿まりはやや弱く、層厚は5～45cmである。第2黒色帯に相当する。

第8層は、暗褐色を呈する第7層の下部で、9層への漸移層である。綿まりはやや弱く、層厚は5～10cmである。第2黒色帯下部に相当する。

第9層は、明黄褐色を呈するハードローム層である 第3図 基本土層図



る。粘性・綿まりともに強く、層厚は6～12cmである。

第10層は、黄褐色を呈するハードローム層である。黒色スコリアを微量含み、綿まりが強く、層厚は20～24cmである。

第11層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・綿まりともに強く、層厚は22～26cmである。

第12層は、明黄褐色を呈するハードローム層である。白色粘土粒子をわずかに含み、綿まりが強く堅緻で、層厚は25～32cmである。

第13層は、暗褐色を呈するハードローム層である。粘性・綿まりともに強く、層厚は26～34cmである。

第14層は、灰白色を呈する粘土層である。綿まりが強く、粘性が強い。下部が未掘のため、層厚は不明である。

なお、遺構は第5層の上面で確認できた。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、古墳1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

##### 古墳

###### 第13号墳（第4～6図）

位置 調査区中央部のA 2 i2区を中心とした、標高 24 m ほどの台地中央部に位置している。

確認状況 墳丘は調査区中央部に位置し、周辺は畠地である。墳丘の西側は削平されており、残存する規模は南北 13.18 m、東西 9.98 m、高さ 2.45 m である。墳丘の南側は、裾部から高さ 0.75 m のところで、檻状の平場となっており、その規模は長さ 7.20 m、幅 1.80 m ほどである。

重複関係 第2号土坑、第1・3～5号溝跡に掘り込まれている。

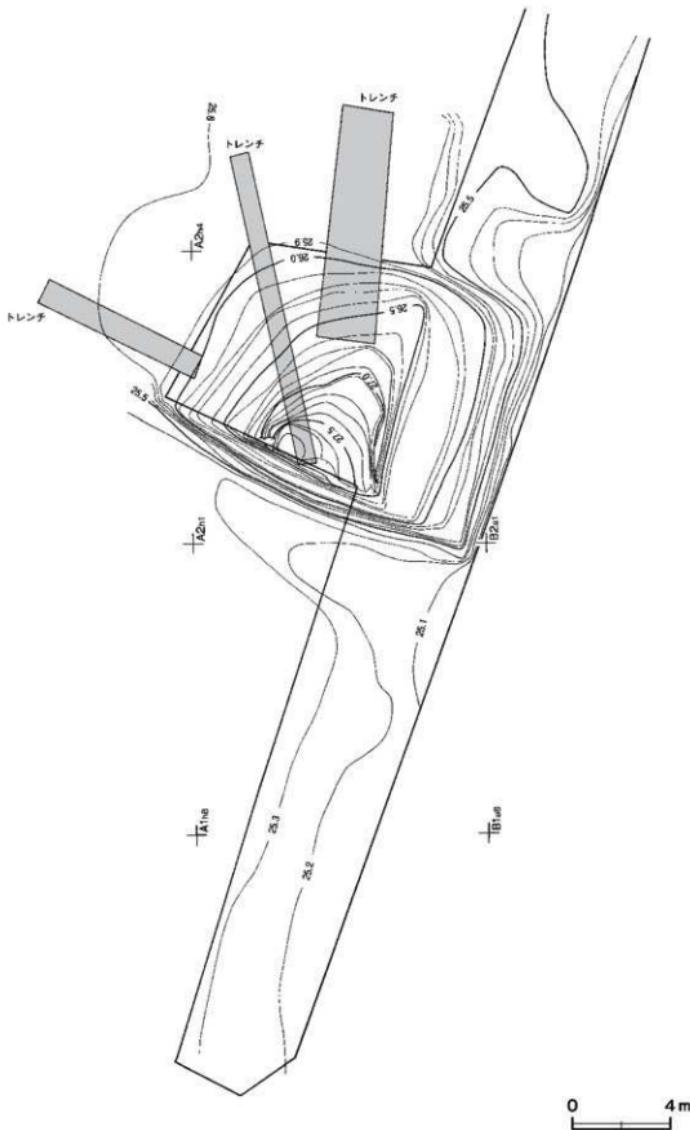
規模と形状 周溝の南側が調査区域外へ延びているため、全体の規模は不明である。周溝は北東部で鋭角に屈曲し、南側へ行くにつれ幅が広がっている。形状はほぼ逆台形状で、調査区南端で確認された周溝の東西幅は外法で 33.38 m、内法で 17.95 m である。形状から前方後円墳の前方部の可能性があり、後円部が南に位置する前方後円墳とすると、内法で全長 45 m ほど、主軸方向は N - 18° - E と想定される。

墳丘構築状況 盛土を大別すると暗褐色土を中心とする層と褐色土を中心とする層の2層に分けられることから、2段階の工程が考えられる。古墳の形状を決め、旧表土である第1・2層を整えた後、1段階は、旧表土から幅 8 m ほどの周溝を掘り込みながら、その時の土である暗褐色土などの第4～9層や第34～41層を 60～80cm ほど旧表土の上に盛土し、突き固める工程で、断面が台形状の墳丘基壇が構築されている。2段階は、さらに周溝を深く掘り、基壇上に1段階より小さいまとまりで褐色土を中心とする第10～23層や第42～49層を突き固めながら 60～70cm ほど盛土している工程である。

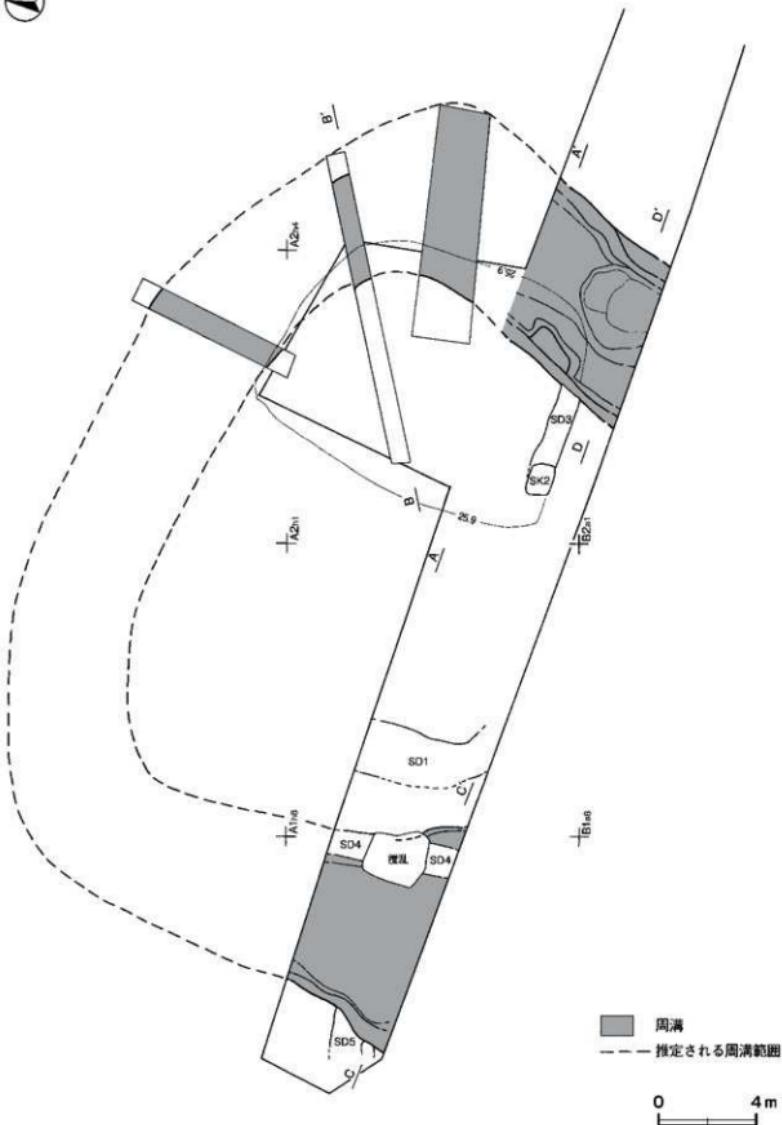
周溝 調査区西部と中央部で確認したほか、トレンチ調査により、墳丘北部、墳丘東部の2か所で上端を確認している。上幅 6.95～10.06 m、下幅 5.20～8.66 m、旧表土からの深さ 0.98～1.46 m で、断面形はほぼ逆台形である。覆土は、第 26・27・29・30 層などの暗褐色土や黒褐色土が墳丘側から流入している自然堆積である。

##### 墳丘・周溝土層解説

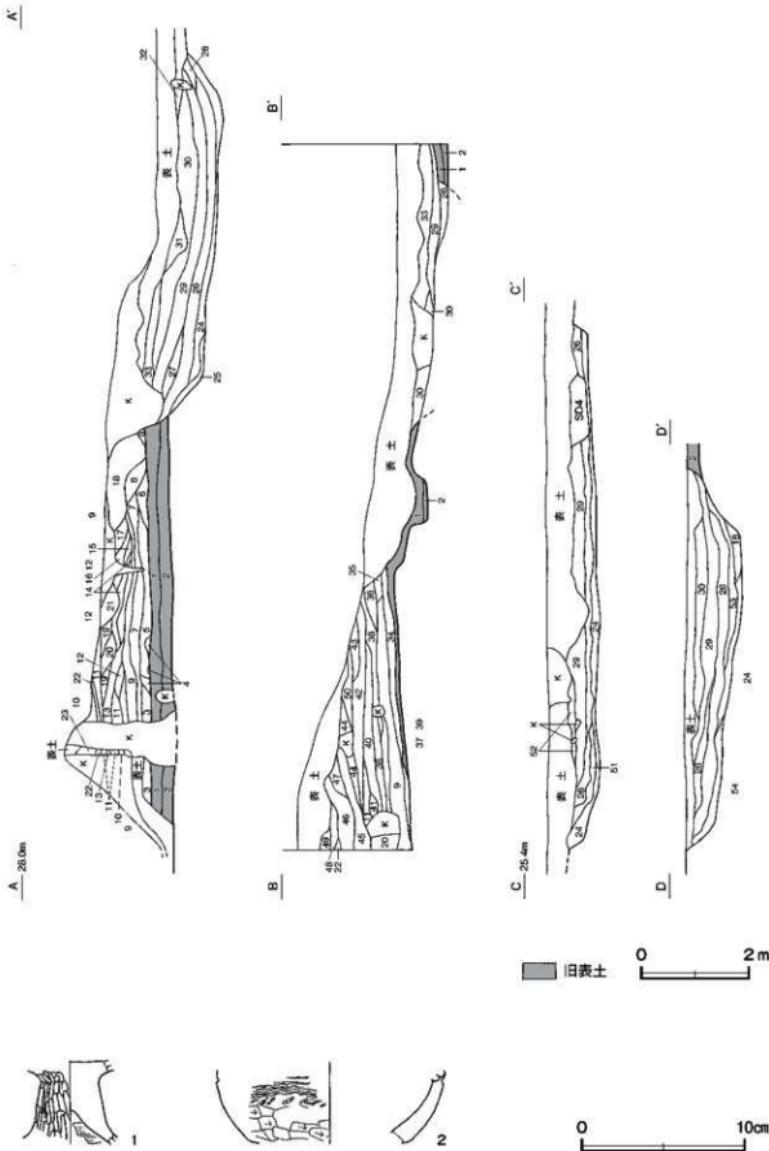
1	暗	褐	色	ロームブロック微量	（旧表土）	21	黒	褐	色	ロームブロック少量	
2	褐	色	ロームブロック多量	（旧表土）	22	褐	色	ロームブロック少量			
3	暗	褐	色	ロームブロック中量		23	褐	色	ロームブロック少量		
4	黒	褐	色	ロームブロック微量		24	暗	褐	色	ロームブロック少量	
5	暗	褐	色	ロームブロック中量		25	褐	色	ロームブロック中量		
6	黒	褐	色	ロームブロック少量		26	黒	褐	色	ロームブロック微量	
7	暗	褐	色	ロームブロック少量		27	黒	褐	色	ロームブロック微量	
8	暗	褐	色	ロームブロック中量		28	暗	褐	色	ロームブロック微量	
9	褐	色	ロームブロック多量		29	黒	褐	色	ロームブロック・炭化粒子・白色粘土粒子微量		
10	褐	色	ロームブロック多量		30	暗	褐	色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量		
11	黒	褐	色	ロームブロック微量		31	暗	褐	色	ロームブロック・炭化粒子微量	
12	褐	色	ロームブロック中量		32	暗	褐	色	ロームブロック微量		
13	黒	褐	色	ロームブロック微量		33	暗	褐	色	ロームブロック少量・炭化粒子微量	
14	暗	褐	色	ロームブロック少量		34	黒	褐	色	ロームブロック・黒色土ブロック少量	
15	暗	褐	色	ロームブロック微量		35	暗	褐	色	ロームブロック微量	
16	黒	褐	色	ロームブロック微量		36	暗	褐	色	ロームブロック少量	
17	褐	色	ロームブロック中量		37	褐	色	ロームブロック中量・黒色土ブロック少量			
18	暗	褐	色	ロームブロック少量		38	黒	褐	色	ロームブロック微量	
19	褐	色	ロームブロック中量		39	暗	褐	色	ロームブロック・黒色土ブロック少量		
20	黒	褐	色	ロームブロック少量		40	暗	褐	色	ロームブロック中量・黒色土ブロック少量	



第4図 第13号墳実測図(1)



第5図 第13号墳実測図(2)



第6図 第13号墳・出土遺物実測図

41	褐	色	ロームブロック中量	48	暗	褐	色	ロームブロック少量	
42	暗	褐	色	ロームブロック中量	49	褐	色	ロームブロック少量	
43	暗	褐	色	ロームブロック少量, 黒色土ブロック微量	50	暗	褐	色	ロームブロック微量
44	暗	褐	色	ロームブロック少量, 黒色土ブロック微量	51	暗	褐	色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量
45	褐	色	ロームブロック多量	52	褐	色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量		
46	褐	色	ロームブロック中量	53	褐	色	ロームブロック少量		
47	褐	色	ロームブロック中量	54	暗	褐	色	ロームブロック微量	

遺物出土状況 土師器片 3点(高坏1, 壺2), 須恵器片 1点(壺)のほか, 繩文土器片 15点(深鉢), 土師質土器片 26点(皿6, 鍋18, 鉢2), 瓦質土器片 9点(焰焰), 陶器片 19点(碗4, 皿7, 灯明受皿2, 鉢3, 檻鉢3), 磁器片 18点(碗6, 皿9, 徳利3), 鉄製品 1点(釘), 瓦片 4点が, 墳丘南側の裾部を中心で散在した状態で出土している。1は東側周溝の覆土中から, 2は墳丘北部の表土から, それぞれ出土している。

所見 墳丘や周溝の構築状況から古墳とした。周溝の形状から, 前方部が北に位置する前方後円墳の可能性がある。調査区域が前方部と考えられる部分の一部だけであったことから, 主体部は不明である。時期は, 墳輪片が1片も出土していないことや墳丘から出土した須恵器片や周溝から出土した高坏脚部片から, 5世紀後葉と考えられる。

第13号墳出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高坏	-	(5.1)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	腹部外面へラ磨き 内面ハケ目	東側周溝 覆土中	10% PL 3
2	須恵器	壺	-	(45)	-	長石・石英・細縫	黒褐色	普通	全体中位に横走沈線文, 横彌波状文, 刺突文 全体下位へラ削り	墳丘北部 表土	10% PL 3

## 2 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は, 土坑1基, 溝跡3条を確認した。以下, 遺構及び遺物について記述する。

### (1) 土坑

#### 第1号土坑(第7図)

位置 調査区東部のB 2 b6区を中心とした, 標高25mほどの台地中央部に位置している。

規模と形状 西部と南部は搅乱されているが, 現存部から径0.82mほどの円形と推定される。深さは24cmで壁は緩やかに立ち上がっている。

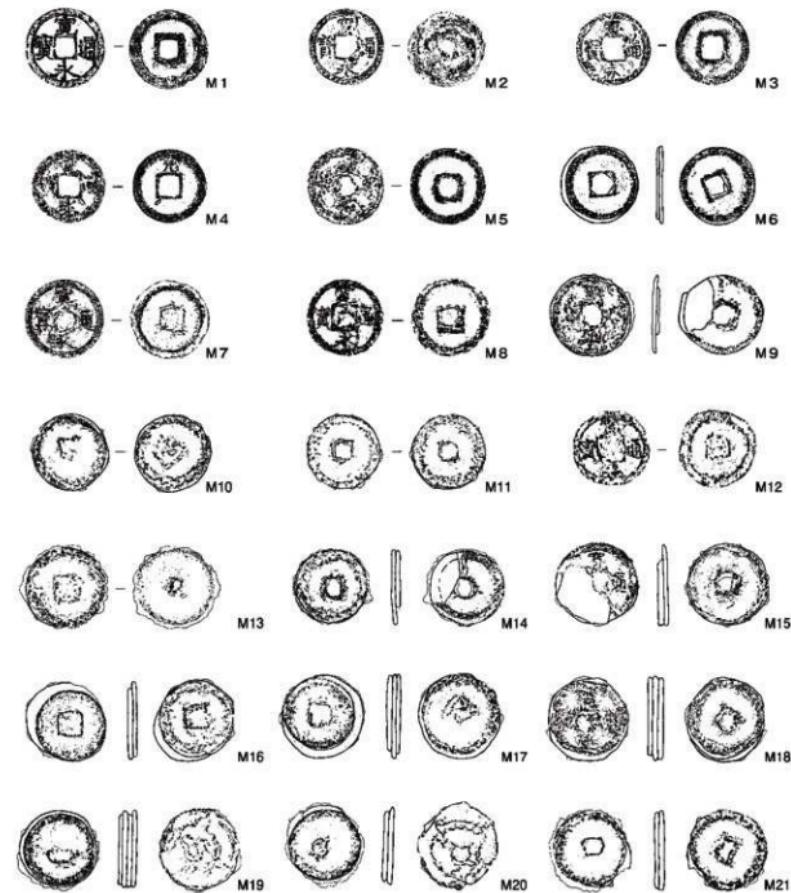
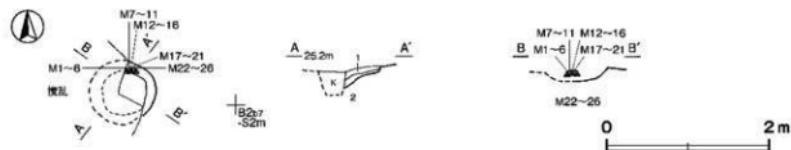
覆土 2層に分層できる。いずれの層にもロームブロック・炭化粒子が含まれており, 埋め戻されている。

#### 土層断解説

1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 燃土粒子・炭化粒子微量 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量

遺物出土状況 土師質土器片 1点(小皿), 陶器片 2点(皿), 磁器片 1点(碗), 金属製品 40点(錢貨)が, 覆土中から出土している。錢貨は北壁寄りの覆土下層から, 6~8枚ずつ重なって出土しており, 供えられた可能性がある。

所見 時期は, 出土土器から19世紀後半と考えられる。錢貨の出土状況や埋め戻されていることから, 墓坑の可能性がある。



0 5cm

第7図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物觀察表(第7図)

番号	銘種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初説年	特徴	出土位置	備考
M 1	寛永通寶	2.46	0.58	0.13	3.06	銅	1636	古寛永 無背銘	覆土下層	PL 4
M 2	寛永通寶	2.38	0.46	0.17	3.36	銅	1668	新寛永 無背銘	覆土下層	PL 4
M 3	寛永通寶	2.32	0.65	0.11	0.11	銅	1668	新寛永 無背銘	覆土下層	
M 4	寛永通寶	2.29	0.65	0.11	2.55	銅	1668	新寛永 青元	覆土下層	
M 5	寛永通寶	2.34	0.52	0.12	3.69	銅	1668	無背銘	覆土下層	
M 6	銭貨	2.38	0.65	0.19	4.89	銅	-	無背銘 2枚接合	覆土下層	
M 7	寛永通寶	2.45	-	0.13	3.18	銅	1668	新寛永 無背銘	覆土下層	
M 8	寛永通寶	2.35	0.31	0.20	2.66	銅	1668	新寛永 無背銘	覆土下層	
M 9	銭貨	2.41	0.61	0.11	4.33	銅	-	無背銘 2枚接合	覆土下層	
M10	銭貨	2.28	-	0.12	2.46	銅	-	無背銘	覆土下層	
M11	銭貨	2.28	0.55	0.11	2.45	銅	-	無背銘	覆土下層	
M12	寛永通寶	2.41	0.40	0.12	3.30	銅	1668	新寛永 無背銘	覆土下層	
M13	銭貨	2.40	[0.65]	0.21	4.03	銅	-	無背銘	覆土下層	
M14	銭貨	2.25	0.51	0.22	(3.19)	銅	-	1枚目銅銘 2枚目鉄銘	覆土下層	
M15	寛・通・	-	0.48	0.33	(4.67)	銅	1668	1枚目鉄銘 2枚目新寛永	覆土下層	
M16	銭貨	-	-	0.34	(5.63)	銅	-	1・2枚目銅銘	覆土下層	
M17	銭貨	-	-	0.50	9.46	銅	-	1枚目鉄銘 2枚目銅銘 3枚目鉄銘	覆土下層	
M18	□□□ 寛	-	-	0.63	11.26	銅	-	1枚目銅銘 2枚目鉄銘 3枚目銅銘	覆土下層	
M19	銭貨	-	-	0.75	10.96	銅	-	1・2枚目銅銘 3・4枚目鉄銘	覆土下層	
M20	銭貨	-	-	0.70	(5.56)	銅	-	1枚目鉄銘 2枚目銅銘	覆土下層	
M21	銭貨	-	-	0.48	(6.53)	銅	-	2枚接合	覆土下層	
M22	銭貨	2.29	0.63	0.25	(2.66)	銅	-	鍋のため表裏不明	覆土下層	計測値のみ
M23	銭貨	2.49	-	0.23	(2.04)	銅	-	鍋のため表裏不明	覆土下層	計測値のみ
M24	銭貨	2.38	-	0.21	(1.81)	銅	-	鍋のため表裏不明	覆土下層	計測値のみ
M25	銭貨	-	-	0.29	(3.45)	銅	-	鍋のため表裏不明	覆土下層	計測値のみ
M26	銭貨	2.54	[0.46]	0.32	(3.27)	銅	-	鍋のため表裏不明	覆土下層	計測値のみ

## (2) 溝跡

## 第1号溝跡(第8図)

位置 調査区西部のA 1h8区からA 1j8区にかけて、標高は25mほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第13号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 A 1h8区辺りで北方向に彎曲して、A 1j8区方向へ直線的に伸びている。南部と北部が調査区域外へ延びているため、確認できた長さは428mである。上幅1.38~2.22m、下幅0.98~1.58m、深さ16~30cmである。断面形は浅いU字状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

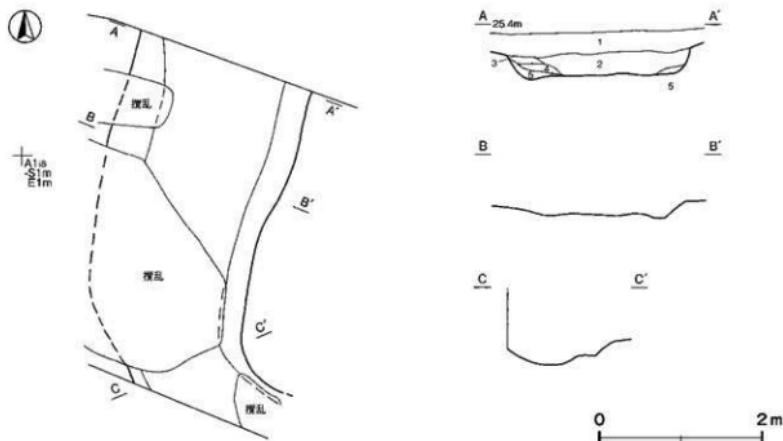
覆土 5層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

## 土層解説

- 1 黒 極 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 増 極 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 増 極 色 ロームブロック中量

- 4 灰 黄 極 色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 5 ふくら黄褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片4点(焰焰),瓦質土器片2点(鉢)陶器片7点(碗3皿2鉢2)磁器片4点(碗)が,覆土中から出土している。出土土器は,細片のため図示できなかった。  
所見 時期は,出土遺物から19世紀後半と考えられる。性格は不明である。



第8図 第1号溝跡実測図

#### 第3号溝跡(第9図)

位置 調査区西部のA 2j1区からA 2j2区にかけて,標高25mほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第13号墳を掘り込み,第2号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 A 2j1区からA 2j2区にかけて,北西方向N-62°-Wに直線的に延びている。北西部が第2号土坑に掘り込まれ,南東部が第13号墳の東側周溝と重複しているため,確認できた長さは,4.10mである。上幅0.88~1.04m,下幅0.78~0.92m,深さ10~16cmである。断面形は浅いU字状で,壁は緩やかに立ち上がりっている。底面の壁際で,深さ10~15cmのピットが3か所確認されている。

覆土 2層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれ,不規則に堆積していることから,埋め戻されている。

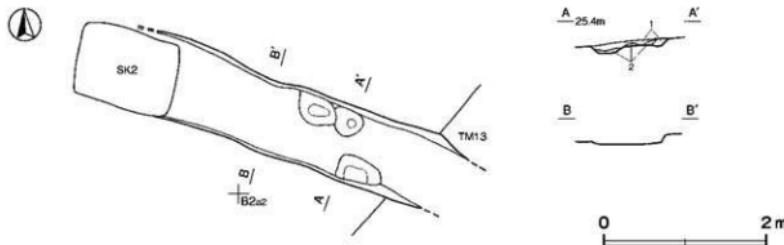
#### 土層解説

1 塗褐色 ロームブロック少量

2 に赤い黄褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片1点(鉢),陶器片1点(擂鉢)が,覆土中から出土している。出土土器は,細片のため図示できなかった。

所見 時期は,出土遺物から19世紀後半と考えられる。性格は不明である。



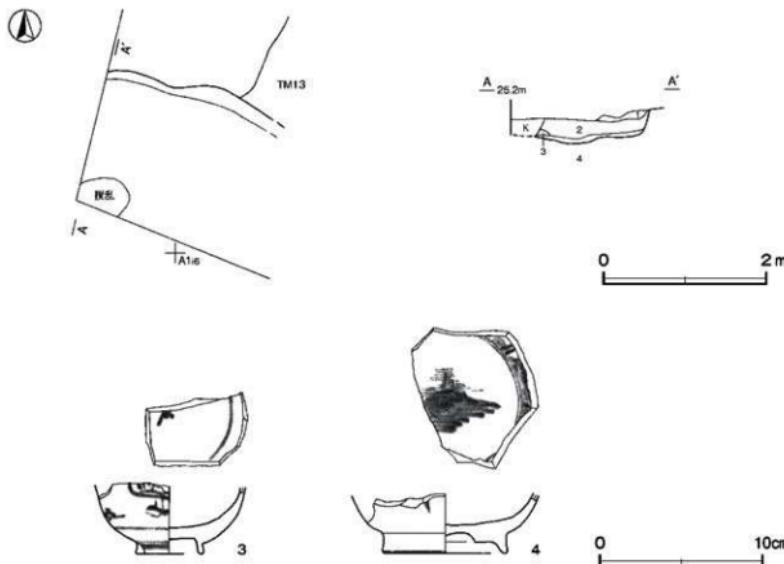
第9図 第3号溝跡実測図

#### 第5号溝跡（第10図）

位置 調査区西部のA 1h5区からA 1h6区にかけて、標高25mほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第13号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 A 1h5区からA 1h6区にかけて、東方向 N - 102° - E に直線的に延びている。西部が調査区外へ延び、東部が第13号墳の西側周溝と重複しているため、確認できた長さは1.98mである。南側が調査区外のため、確認できた幅は、1.92mである。深さは36cmで、断面形は浅いU字状で、壁は外傾している。



第10図 第5号溝跡・出土遺物実測図

覆土 4層に分層できる。いずれの層にもロームブロックなどが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 炭化物少量、ロームブロック微量  
2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック少量  
4 にほい黄褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片1点(熔接),瓦質土器片3点(熔接)陶器片3点(碗2 灯明皿1)磁器片5点(碗)が、全域の覆土上層から下層にかけて出土している。埋め戻しの過程で廃棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土遺物から18世紀後半と考えられる。性格は不明である。

第5号溝跡出土遺物観察表(第10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
3	磁器	碗	-	(4.1)	[4.0]	緻密 灰白	染付 舞須 草花文 単描	透明釉	肥前	覆土中	30%
4	磁器	碗	-	(3.7)	7.4	緻密 灰白	染付 舞須 山水文 単描	透明釉	肥前	覆土中	30% PL 3

表2 江戸時代の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規 模			新面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	A1h8 ~ A1j8	-	彎曲	(4.28)	1.38 ~ 2.22	0.98 ~ 1.58	16 ~ 30	浅いU字状	縦斜	人為	土師質土器 瓦質土器 陶器 磁器	TM13→本跡
3	A2j1 ~ A2j2	N= 62°~ E	直線	(4.10)	0.88 ~ 1.04	0.78 ~ 0.92	10 ~ 16	U字状	縦斜	人為	土師質土器 陶器	TM13→本跡 → SK 2
5	A1h5 ~ A1h6	N= 102°~ E	直線	(1.98)	(1.92)	(1.75)	36	浅いU字状	外傾	人為	土師質土器 瓦質土器 陶器 磁器	TM13→本跡

### 3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期が明らかでない土坑1基、溝跡2条を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

#### (1) 土坑

##### 第2号土坑(第11図)

位置 調査区中央部のA2j1区、標高25mほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第3号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.26m、短軸0.96mの長方形で、長軸方向はN-78°-Wである。底面は平坦である。深さは74cmで、壁は直立している。

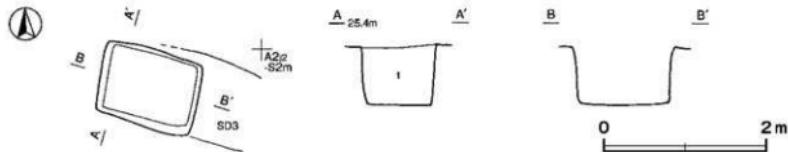
覆土 単一層で、ロームブロックを含む暗褐色土で埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 須恵器片1点(坏)、陶器片1点(擂鉢)が、覆土中から出土している。出土土器は、細片のため図示できなかった。

所見 時期は、擂鉢片から19世紀以降の可能性があるが、細片であり、明確ではない。性格は不明である。



第 11 図 第 2 号土坑実測図

(2) 溝跡

第 2 号溝跡 (第 12 図)

位置 調査区東部の B 2 a7 区から B 2 b7 区にかけて、標高 25 m ほどの台地中央部に位置している。

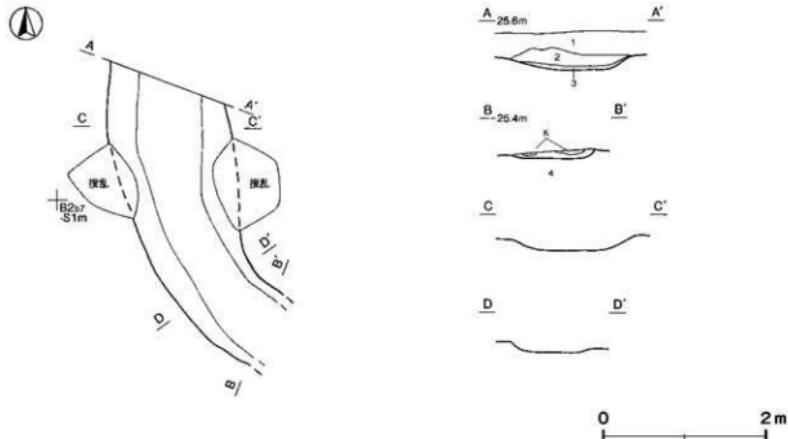
規模と形状 B 2 a7 区から B 2 b7 区にかけて、北方向へ彎曲して延びている。北部が調査区域外へ延びていて、確認できた長さは 3.30 m である。上幅 0.98 ~ 1.46 m、下幅 0.56 ~ 0.80 m、深さ 12 ~ 20 cm である。断面形は浅い U 字形で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 4 層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれ 不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- |          |           |             |          |           |
|----------|-----------|-------------|----------|-----------|
| 1 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量 | 燒土粒子・炭化和子微量 | 3 黒 色    | ロームブロック中量 |
| 2 塗 褐 色  | ロームブロック少量 | 燒土粒子・炭化和子微量 | 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック多量 |

所見 出土遺物がなく時期・性格ともに不明である。



第 12 図 第 2 号溝跡実測図

#### 第4号溝跡(第13図)

位置 調査区東部のA 1h7区からA 1i7区にかけて、標高25mほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第13号塙を掘り込んでいる。

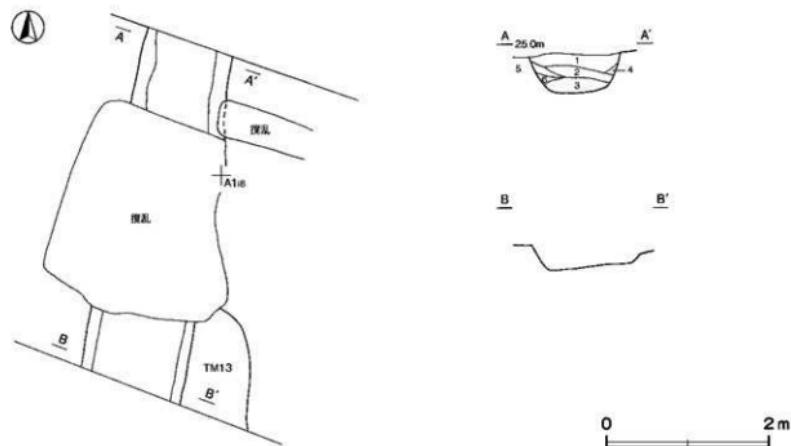
規模と形状 A 1h7区からA 1i7区にかけて、北方向(N-8°-E)へ直線的に延びている。南部と北部が調査区域外へ延びているため、確認できた長さは432mである。上幅1.10~1.30m、下幅0.76~1.04m、深さ20~46cmである。断面形はU字状で、壁は外傾している。

覆土 6層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

##### 土層解説

1 噴褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 にぶり黄褐色	炭化物中量、ロームブロック少量
2 噴褐色	ロームブロック・炭化物少量	5 にぶり黄褐色	ロームブロック・炭化物少量
3 噴褐色	炭化物中量、ロームブロック少量	6 にぶり黄褐色	ロームブロック少量、炭化物微量

所見 走向方向が地籍図の区割りとほぼ一致することから、区画溝と考えられる。時期は、出土遺物がなく不明である。



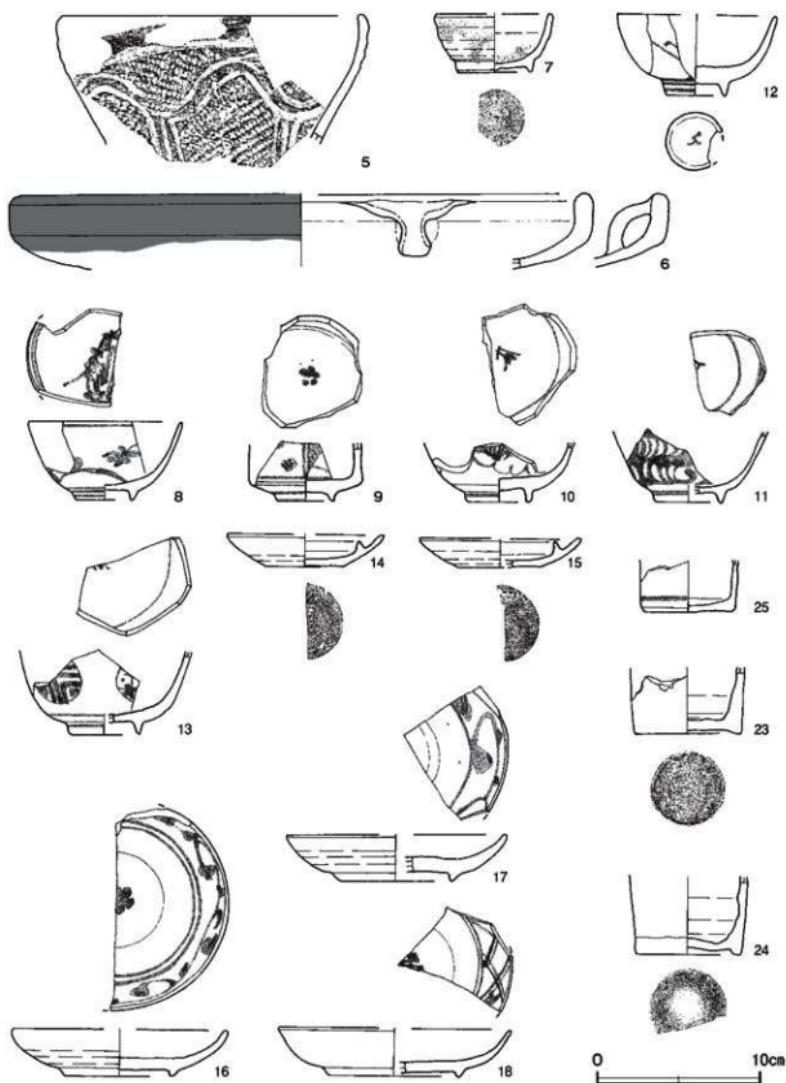
第13図 第4号溝跡実測図

表3 その他の溝跡一覧表

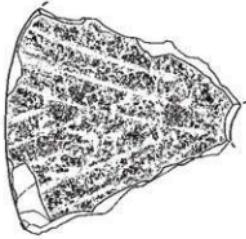
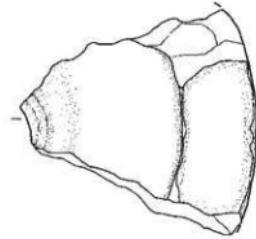
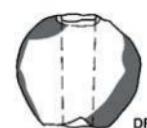
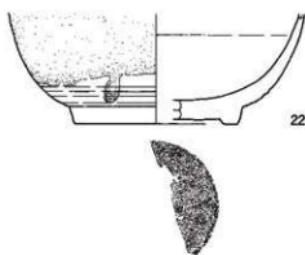
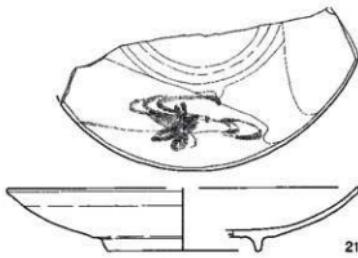
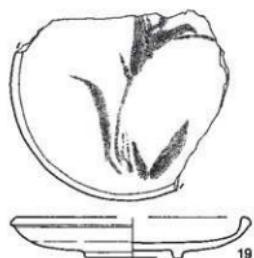
番号	位置	方向	平面形	規 模			新面	壁面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)					
2	B 2a7 ~ B 2b7	-	弯曲	(3.30)	0.98 ~ 1.46	0.56 ~ 0.80	12 ~ 20	浅い U字状	鍬削	人為	
4	A 1h7 ~ A 1i7	N-8°-E	直線	(4.32)	1.10 ~ 1.30	0.76 ~ 1.04	20 ~ 46	U字状	外傾	人為	TM13 → 本跡

(3) 遺構外出土遺物（第14～17図）

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を記載する。



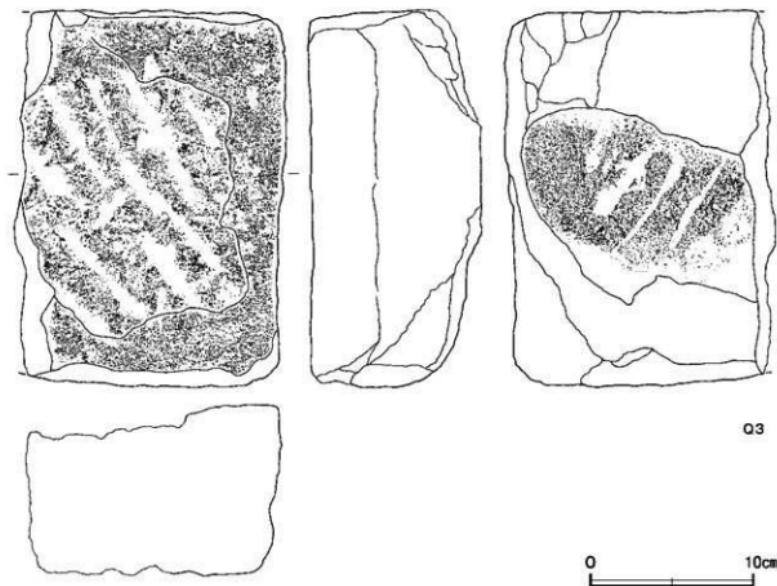
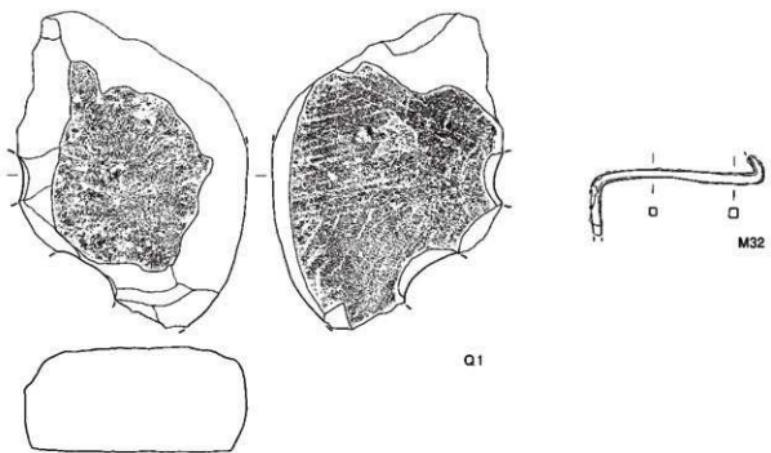
第14図 遺構外出土遺物実測図(1)



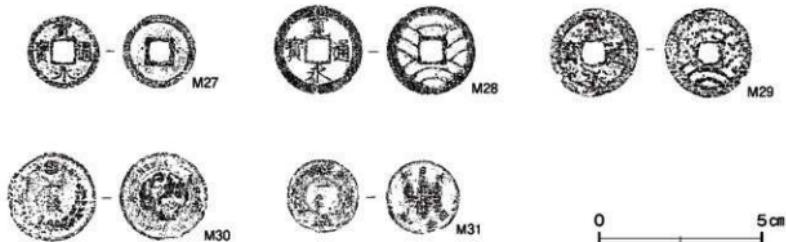
0 3cm

0 10cm

第15図 遺構外出土遺物実測図(2)



第 16 図 遺構外出土遺物実測図 (3)



第 17 図 遺構外出土遺物実測図(4)

遺構外出土遺物観察表(第 14 ~ 17 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	縄文土器	深鉢	[18.0]	(8.0)	-	長石・石英・雲母	明褐色	普通	口横部地文の横文上に2本の次線による波状文 底部3本の辻線による巻垂文	埴丘表土	10%
6	土師質土器	焰壺	[35.0]	(4.6)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐色	普通	外・内面横ナデ 耳部貼付 外面擦付等	埴丘表土	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	輪裏	産地	出土位置	備考
7	陶器	小鉢	[7.0]	3.5	[4.6]	長石・石英・灰白	外・内面施釉 底部回転へラ削り	灰釉	不明	表土	40%
8	磁器	小碗	[9.4]	4.8	3.4	緻密 灰白	染付 外・内面草花文	透明釉 白泥	不明	埴丘表土	40%
9	磁器	小碗	-	(3.6)	3.4	緻密 灰白	染付 横山水文・升舟文 見込コンニヤ タ印判	透明釉	肥前	埴丘表土	40%
10	磁器	中碗	-	(4.4)	[4.0]	緻密 灰白	染付 菊花文・見込草花文	透明釉	肥前	埴丘表土	40%
11	磁器	中碗	-	(3.6)	3.4	緻密 灰白	染付 梅花文・見込草花文	透明釉	肥前	埴丘表土	40%
12	磁器	中碗	[9.8]	5.0	(3.6)	緻密 灰白	染付 草花文・見込草花文	透明釉	肥前	表土	30%
13	磁器	中碗	-	(5.2)	[4.2]	緻密 灰白	染付 円文	透明釉	肥前	埴丘表土	20%
14	陶器	灯明便器	[9.6]	2.0	[4.8]	表石 に沁い赤褐色	油測切立状 底部回転 へラ削り	鉄輪	瀬戸・美濃	表土	50% PL 3
15	陶器	灯明便器	[10.0]	1.8	[5.0]	長石 に沁い赤褐色	油測切立状 底部回転 へラ削り	鉄輪	瀬戸・美濃	表土	50% PL 3
16	磁器	小皿	[13.0]	2.9	6.6	緻密 灰白	染付 蔷薇草文・見込五弁花	透明釉	肥前系	埴丘表土	50% PL 3
17	磁器	小皿	[13.4]	2.9	[6.8]	緻密 灰白	染付 蔷薇草文	透明釉	肥前系	埴丘表土	20% PL 3
18	磁器	五寸皿	[14.0]	2.9	[8.2]	緻密 灰白	染付 斜格子文・見込五弁花	透明釉	肥前系	埴丘表土	20%
19	磁器	五寸皿	[13.8]	2.5	5.8	緻密 黒オリーブ	染付 草花文	透明釉	肥前系	埴丘表土	60% PL 3
20	磁器	五寸皿	[14.4]	4.0	8.0	緻密 灰白	染付 樹籠山水文・輸花	透明釉	肥前	埴丘表土	50% PL 3
21	陶器	中皿	[21.5]	3.9	[9.4]	緻密 淡黃	外・内面施釉 白泥 滝水・草花文輸 花	透明釉	肥前系	埴丘表土	40% PL 3
22	陶器	鉢	-	(6.8)	[10.0]	緻密 灰黄	外・内面施釉 蛇目高台	灰釉	瀬戸・美濃	表土	40%
23	陶器	德利	-	(4.0)	6.5	長石・石英・赤色粒子	外・内面施釉 圓軌式切り後ナデ	灰釉	瀬戸・美濃	表土	20%
24	陶器	德利	-	(4.8)	6.0	緻密 灰白	外面施釉 蛇目高台	灰釉	瀬戸・美濃	表土	20%
25	磁器	德利	-	(3.2)	[5.6]	緻密 灰白	染付 圖線文	透明釉	肥前	表土	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・ 鐵錫・褐錫	明赤褐色	外・内面施釉条痕文	埴丘表土	
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	地文の擦り糸文上に沈旋律による巻垂文	第5号溝跡 覆土中	
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・ 鐵錫	に34度	地文の段段溝線上に横位の微隆起線文	表土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	土玉	3.8	3.5	1.1	(43.11)	長石・石英・雲母	褐	一方向からの穿孔 一部蝶貝付着 一部欠損	表土	PL 4

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	石臼	(195)	(142)	64	(2,510)	砂岩	上臼 供給口・芯受け一部残存 副溝多条 副溝断面浅いV字形 回転方向反時計回り	埴丘表土	PL 4
Q 2	石臼	(149)	(146)	63	(1,230)	安山岩	上臼 芯受け一部残存 幅4.7cm、高さ22cmほどの縁取り 副溝断面U字形	表土	PL 4
Q 3	研石	23.1	(167)	(105)	(4,370)	砂岩	上面三方面取り 両面に石切り溝 1/2欠損	埴丘表土	PL 4

番号	銘種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鋤年	特徴	出土位置	備考
M 27	寛永通貫	2.24	0.61	0.11	2.48	鋼	1668	新寛永 無背鉄	埴丘表土	PL 4
M 28	寛永通貫	2.75	0.65	0.11	4.15	鋼	1769	四文鉄 寛十一通	埴丘表土	PL 4
M 29	寛永通貫	2.83	0.65	0.12	4.76	鋼	1769	四文鉄 寛十一通	表土	
M 30	一鉄	2.85	-	0.13	5.63	鋼	1887	亀一鉄	埴丘表土	PL 4
M 31	一鉄	2.33	-	0.13	3.46	青銅	1916	桐一鉄	表土	昭和の鉄

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 32	不明 鉄製品	(10.6)	0.6	0.7	(3427)	鉄	新面四角形 先端部逆方向に屈曲	埴丘表土	PL 4

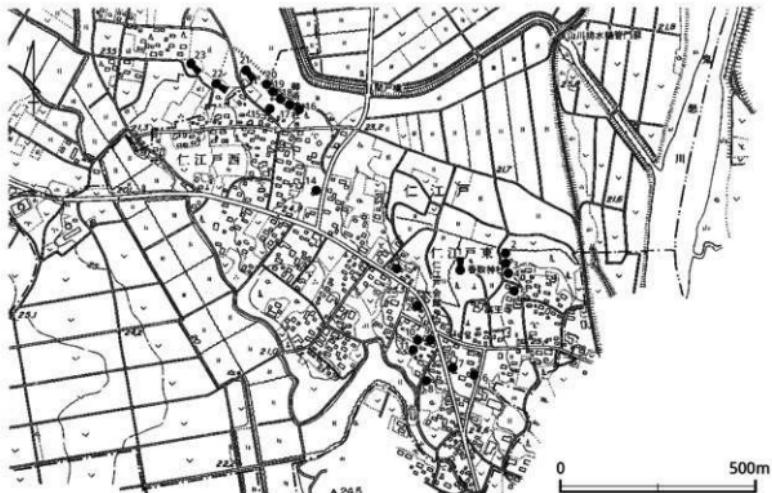
## 第4節 まと め

今回の調査で、古墳1基、江戸時代の土坑1基、溝跡3条などを確認した。ここでは、仁江戸古墳群の中で、当古墳がどのように位置付けられるかを述べてまとめとしたい。

当古墳群は同じ台地上に隣接している柴崎古墳群を含めると、4基の前方後円墳と19基の円墳からなる。これらの古墳は、集落内に広く分布する東側の地域と、山林内に密集する西側の地域の大きく二つの支群に分けることができる。今回調査した13号墳<sup>1)</sup>は、東支群の北西端部に位置する。

当古墳群の中で古く考えられている古墳は、西支群の柴崎1・2号墳(22・23号墳)<sup>2)</sup>である。柴崎1号墳は全長約65m、柴崎2号墳は全長約55mの前方後円墳である。いずれも前方部が未発達で、後円部と後方部の高低差が大きく、埴輪を伴っていない特徴があり、4世紀後葉に位置付けられている。柴崎1号墳に隣接している21号墳も柴崎1号墳とほぼ同規模の前方後円墳であり、当古墳群は、西支群が先行して構築されたものと考えられる。

次の時期に位置付けられるのが、東支群の北部に位置している香取神社古墳(1号墳)<sup>3)</sup>である。香取神社古墳は、前方部を北側に向けた全長約70mの前方後円墳である、前方部は後円部に比べて短く低い古式の様相を示している。遺物としては、埴丘裾部などから比較的多量の壺形埴輪が採集されている。壺形埴輪の特徴は、「胴長の器形と粘土の貼り付けにより不明瞭な段を形成した有段口縁である」とされ、周辺地域での類似資料として上出島2号墳出土品<sup>4)</sup>があげられている。上出島2号墳は全長56mの前方後円墳で、後円部頂と埴丘裾部において壺形埴輪の配列が検出された。壺形埴輪は胴長で外反する有段口縁を有し、外面にはハケ、内面にはナデによる調整が施されている。後円部に設けられた粘土櫛からは、滑石製勾玉、管



第18図 仁江戸古墳群分布図(柴崎古墳群含む)【註6】文献より】

玉、鉄剣、鉄鎌、鉄斧が出土しており、こうした出土遺物から築造年代は5世紀前葉頃とされている。香取神社古墳の位置付けも、上出島2号墳の壺形埴輪との類似性から5世紀前葉頃と考えられる。

当古墳の築造年代を推定するための、火山灰の分析結果では、「3世紀代とされる浅間Cテフラ(As-C)より新しく、6世紀第二四半期される棟名ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)より古い」<sup>5)</sup>と報告されている。出土遺物や埴輪を持たないことなどから5世紀後葉とした当古墳の築造年代には、妥当性があると考える。当古墳の形状は香取神社古墳と同じように、前方部を北側に向けた前方後円墳の可能性がある。しかも、当古墳は香取神社遺跡と小支谷を挟んで対峙しており、香取神社古墳の次に築造された中核古墳と考えられる。江戸時代後期には、すでに墳丘が削平されていた。これは、墳丘南側の平場近くから陶磁器や古銭などが多く出土したことなどから、塚として信仰の対象となっていたことを示している。

後期の古墳については、東支群の円墳とされる多くの古墳が該当すると考えられる。7号墳<sup>6)</sup>は、東支群の南部に位置する周溝外縁で48mほどの円墳である。粘土床の上に木棺を置いた埋葬施設から鉄刀や鉄鎌が出土し、周溝から形象埴輪片や円筒埴輪片が出土している。出土遺物から、5世紀末から6世紀初頭に位置付けられ、当古墳の直後に築造された古墳と思われる。11号墳<sup>7)</sup>は、昭和30年代に個人住宅内で発見された東支群の南東部に位置する古墳である。埋葬施設は壁が石積みであったとのことから、横穴式石室である可能性が高い。出土遺物は、鉄刀、刀装具、鉄鎌（鎌身長三角形、剣身形、柳葉形など）などで、築造年代は6世紀後葉から7世紀にかけてとされている。

以上のように、当古墳群は鬼怒川中流域における最大級の古墳群として、古墳時代前期から終末期まで続いた古墳群である。当古墳は、出土遺物は少なかったものの、当古墳群中最大の香取神社古墳に続く中期の中核的古墳としての位置付けが可能と思われる。

#### 註

1) 仁江戸古墳群の古墳番号は、下記の文献の番号を使用している。

岩崎卓也 西野元 白石典之 滝沢誠ほか「古墳測量調査報告書Ⅰ」『筑波大学先史学・考古学研究調査報告』5 1991年3月

2) 千代川村史編さん委員会『村史 千代川村生活史』第三巻 前近代資料 2001年3月

3) 白石典之 註1) 文献による。

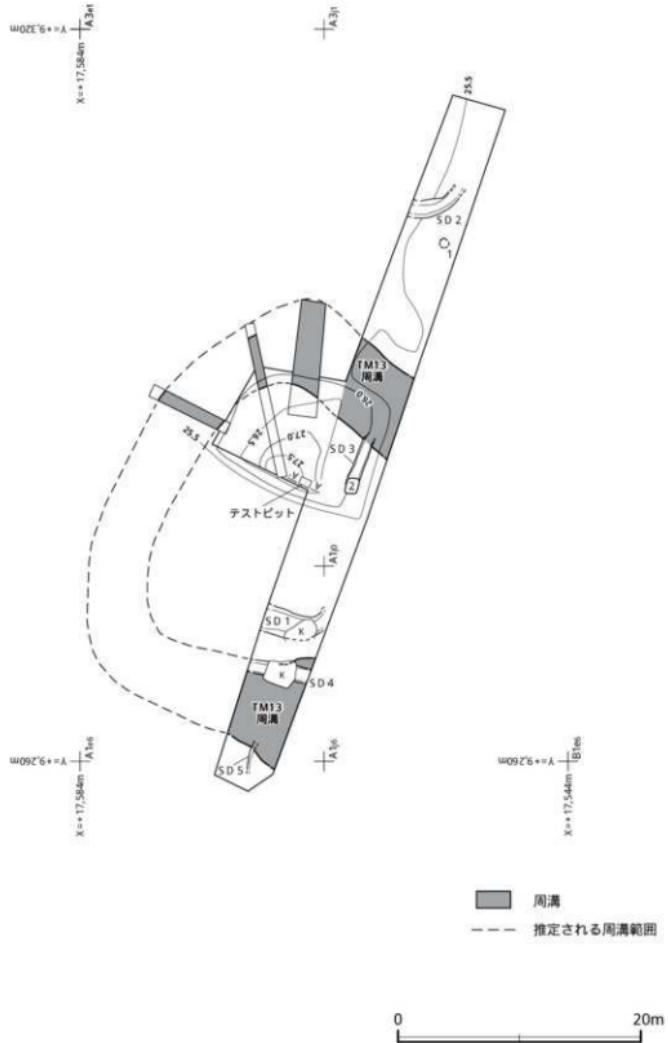
4) 大森信英 高根信和ほか『上出島古墳群』岩井市教育委員会 1976年3月

5) 詳細は、本書の付章参照

6) 山野井哲夫 小川和博 大測淳志「仁江戸7号墳」『八千代町埋蔵文化財調査報告書』9 2002年3月

7) 滝沢誠 註1) 文献による。

A



第19図 仁江戸古墳群遺構全体図

# 付 章

## 仁江戸古墳群 13号墳の火山灰分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

茨城県八千代町に所在する仁江戸古墳群は、鬼怒川中流域の右岸の台地上に位置する。この台地は、鬼怒川西岸段丘群（貝塚ほか編、2000）の南部を構成するが、その形成年代の詳細は明らかではない。周辺の常陸台地や下総台地の形成年代を考慮すれば、おそらく酸素同位体ステージの5c～5aすなわち武藏野台地のM1面～M2面に対比されると考えられる。

仁江戸古墳群は、これまでの発掘調査により5世紀末から6世紀初頭の築造とされている。本報告では、墳丘盛土直下の旧表土および周溝に堆積する土層から、降灰年代の明らかな指標テフラを検出することにより、古墳の築造年代に関わる資料を作成する。

### 1 試料

試料は、仁江戸古墳群13号墳の発掘調査で、墳丘盛土とその直下の旧表土および周溝覆土層が確認された土層断面から、発掘調査者により採取された。墳丘盛土とその直下の旧表土の試料採取箇所、A地点、周溝覆土層の試料採取箇所はB地点とされている。以下に各地点について述べる。

#### (1) A 地点

墳丘盛土直下の旧表土とされるII層は、厚さ約20cm、その下位のIII層とされた土層も厚さ20cmほどであり、ローム層への漸移層とされている。III層の下位にはソフトローム層とされている褐色土層が確認されている。試料は、II層上面からIII層下部まで、厚さ5cmで連続に上位より試料a～試料gまでの7点が採取されている。これらのうち、試料a～試料cまではII層、試料d中にII層とIII層の層界があり、試料e～gはIII層とされている。

分析時の観察では、いずれの試料も外観は黒褐色を呈するシルト質の土壤いわゆる黒ボク土であるが、III層の試料の方が、色調はやや明るく、粘土分も若干多い。本分析では、試料a,c,e,gの4点を選択し、分析に供した。

#### (2) B 地点

周溝覆土は、発掘調査の所見により、上位より①層から⑥層まで分層され、B地点ではこれらのうち、③、④、⑤、⑥の各層が堆積している。⑦層は周溝基底直上の覆土層である。③～⑥層の各層の厚さは20～30cmであり、⑦は10cm前後である。試料は、③層上面から周溝基底まで厚さ5cmで連続に、上位より試料番号1～16までの16点が採取されている。これらのうち、試料番号1～5までは③層、試料番号6中に③層と④層の層界があり、試料番号7～10までは④層、試料番号11～14までは⑤層、試料番号15,16は⑦層とされる。

分析時の観察では、いずれの試料も外観は黒褐色を呈するシルト質の土壤いわゆる黒ボク土である。発掘調査所見では分層されているが、採取された試料の外観からは、その分層に対応した色調や質感の違いは明瞭ではない。傾向としては、下位の試料ほどシルト分が多くなり、砂分が少なくなっている。本分析では、試料番号1～15までの奇数番号の試料8点を選択し、分析に供した。

表1 テフラ分析結果

地点名	層名	試料名	スコリア		火山ガラス		軽石			由来するテフラ
			量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径		
A	II	a	-	-		++	W·g(ox)	1.2		
		c	-	(+)	cl·bw, cl·pm	-				
	III	e	-	(+)	cl·bw, cl·pm	-				
		g	-	(+)	cl·bw, cl·pm	-				
B	③	1	-	-		++	GBr·sb(ox)	1.8	As-B	
		3	-	(+)	cl·bw, cl·pm	+	GBr·sb(ox)	1.0	As-B	
		5	-	(+)	cl·bw, cl·pm	(+)	W·b(ho)	0.8	Hr-FP	
	④	7	-	(+)	cl·bw, cl·pm	++	GBr·sb(ox)	0.8	As-B	
		9	-	-		++	W·b(ho)	1.0	Hr-FP	
	⑤	11	-	+	cl·bw, cl·pm	(+)	W·b(ho)	0.7	Hr-FP	
		13	-	+	cl·bw, cl·pm	(+)	W·g(ox)	0.7	As-C	
	⑦	15	-	+	cl·bw, cl·pm	(+)	W·b(ho)	1.1	Hr-FP	
	⑦	15	-	+	cl·bw, cl·pm	(+)	W·g(ox)	1.1	As-C	
	⑦	15	-	+	cl·bw, cl·pm	(+)	W·g(ox)	0.8	As-C	

凡例 - : 含まれない。 (+) : きわめて微量。 + : 微量。 ++ : 少量。 +++ : 中量。 +++++ : 多量

cl:無色透明。 br:褐色。 bw:バブル型。 md:中間型。 pm:軽石型

GBr:灰褐色。 W:白色。 g:良好。 sg:やや良好。 sb:やや不良。 b:不良

(ox):斜方輝石斑晶包有。 (ho):角閃石斑晶包有。 最大粒径は mm

As-B:浅間 B テフラ。 Hr-FP:榛名ニツ岳伊香保テフラ。 As-C:浅間 C テフラ

## 2 分析方法

試料約 20g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分である Y 字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた纖維束状のものとする。

## 3 結果

結果を表1に示す。以下に地点ごとに述べる。

### (1) A 地点

スコリアはいずれの試料においても認められない。火山ガラスは、II層の試料 c, III層の試料 e, g から極めて微量検出された。いずれの試料も無色透明のバブル型と無色透明の軽石型とが混在する。

軽石は、II層の試料 a に少量含まれ、それ以外の試料には認められない。軽石は、最大径約 1.2mm であり、白色を呈し、発泡は良好、斜方輝石の斑晶を包有する特徴がある。

### (2) B 地点

スコリアはいずれの試料においても認められない。火山ガラスは、⑤層の試料番号 11, 13, ⑦層の試料番号 15 からは微量、③層の試料番号 3, 5, ④層の試料番号 7 からは極めて微量検出された。

いずれの試料も無色透明のバブル型と無色透明の軽石型とが混在する。⑦層の試料番号 15 では、バブル型の方が軽石型よりも若干多い。

軽石は、④層試料番号 9 から中量、③層試料番号 1 と④層試料番号 7 からは少量、⑤層試料番号 3, 5 からは微量、⑥層の試料番号 11, 13, ⑦層の試料番号 15 からは極めて微量検出された。軽石は色調と発泡度および包有する斑晶鉱物の異なる 3 種類のものが識別される。一つは最大径約 1.8mm, 灰褐色を呈し、発泡はやや不良、斜方輝石の斑晶を包有する特徴があり、2 番目は最大径約 1.8mm, 白色を呈し、発泡は不良、角閃石の斑晶を包有する特徴がある。そして 3 番目は、最大径約 1.1mm, 白色を呈し、発泡は良好、斜方輝石の斑晶を包有する特徴がある。この 3 番目の軽石の特徴は、上述した A 地点 II 層試料 a に少量含まれる軽石と同様である。B 地点における軽石の産状は、試料によって複数種の軽石が混在するが、それでも③層から⑦層までの各試料における産状を表 1 でみれば、これら 3 種類の軽石の層位的な出現傾向は、上位より灰褐色軽石、白色で発泡不良、角閃石を包有する軽石、白色で発泡良好、斜方輝石を包有する軽石の順になる。灰褐色軽石は、③層試料番号 1 に比較的多く、白色で発泡不良の軽石は、④層試料番号 9 に濃集し、白色で発泡良好の軽石は⑤層以下の層位に極めて微量散在するという産状である。

#### 4 考察

テフラ分析により確認された 3 種類の軽石のうち、周溝覆土における層位的な産状が最も上位の灰褐色の軽石は、その色調や発泡度および斑晶鉱物の種類から、平安時代の天仁元年（1108）に浅間火山から噴出した浅間 B テフラ（As-B: 新井，1979）に由来すると考えられる。

周溝覆土における層位的な産状が中位の白色軽石は、その色調と発泡度および斑晶鉱物の種類から、古墳時代に榛名火山から噴出したテフラである榛名ニツ岳浜川テフラ（Hr-FA）または榛名ニツ岳伊香保テフラ（Hr-FP）（新井，1979; 早田，1989）のいずれかに由来すると考えられる。Hr-FA は火碎流の噴出を主体とする活動であり、分布域は給源から東方に広がり、遠隔地では細粒の火山ガラスを含むことを特徴とし、Hr-FP は軽石噴火を主体とする活動であり、その分布軸は北東方向に向いており、遠隔地においても軽石として認められている（早田，1989）。今回検出された軽石は、Hr-FA に伴う細粒の火山ガラスが認められないことから、Hr-FP に由来する可能性がある。両テフラの噴出年代については、Hr-FA は 5 世紀末から 6 世紀第 1 四半期ぐらいため（坂口，1993; 中村ほか，2008），Hr-FP は 6 世紀第 2 四半期頃（坂口，1993）にそれぞれ噴出したとされている。

周溝覆土における層位的な産状が最も下位であり、かつ埴丘盛土直下にも認められた白色軽石は、その色調や発泡度および斑晶鉱物の種類、さらには上述した Hr-FP よりも下位であることから、古墳時代に浅間火山から噴出した浅間 C テフラ（As-C: 新井，1979）に由来すると考えられる。As-C の噴出年代については、新井（1979）や町田・新井（2003）では 4 世紀中葉とされているが、これは、石川ほか編（1979）による、群馬県下の As-C の堆積層に直接関わる古墳や方形周溝墓および住居跡などから出土した土器型式の年代観から推定されたものである。一方で、友廣（1988）などは、同様に土器型式の年代観から、古くとも 4 世紀初頭を下ることはないとの見解を示しており、さらに最近では 3 世紀に遡るという見解も出されていることが矢口（2011）に紹介されている。

なお、テフラ分析で各層から微量検出された火山ガラスについては、その形態と周辺地域の台地上におけるテフラの産状から、バブル型火山ガラスは始良 Tn 火山灰（AT: 町田・新井，1976）に由来し、軽石型火山ガラスは武藏野台地などで立川ローム層上部ガラス質火山灰（UG: 山崎，1978）とされているテフラに由来する

と考えられる。いずれのテフラの火山ガラスも、武藏野台地の立川ローム層上部に比較的多く含まれてあり、前述した仁江戸古墳群の位置する台地の形成年代を考慮すれば、古墳の立地する台地上のローム層上部にも含まれていると考えられる。

今回の分析では、A 地点において埴丘盛土直下から As-C が検出されたが、検出された層位の 5 cm 下位の試料からは軽石は全く検出されない。このような産状から、As-C の検出された A 地点の試料 a 採取層位は、As-C の降灰層準に相当する可能性が高い。その場合、古墳の築造年代は、As-C の降灰年代よりも確実に新しいと言える。一方、B 地点の周溝覆土におけるテフラの産状では、周溝基底よりも約 40cm 上位に Hr-FP の軽石の濃集層準が認められ、それより下位の覆土層中には Hr-FP の軽石は極めて微量しか含まれず、周溝基底直上には認められない。このような軽石の産状から、Hr-FP の軽石濃集層準は、降灰層準を示している可能性が高い。すなわち、古墳が構築された後、周溝が 40cm ほど埋積した頃に Hr-FP の降灰があったことになる。なお、周溝覆土下位の⑤層、⑥層から検出された As-C は極めて微量であり、遺跡周辺の土壤が流れ込んだものである可能性が高い。

以上述べたテフラと古墳との層位関係から、13 号墳の築造年代は、3 世紀よりも新しく、6 世紀第 2 四半期よりも古いと言うことができる。この結果は、5 世紀末から 6 世紀初頭とされるこれまでの仁江戸古墳群の築造年代の所見とも整合する。

#### 註

- 1) 新井房夫 1979 「関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層」『考古学ジャーナル』157 41-52p
- 2) 古澤明 1995 「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』101 123-133p
- 3) 石川正之助・井上雄輝・梅沢重昭・松本浩一 1979 「火山堆積物と遺跡 I」『考古学ジャーナル』159 3-40p
- 4) 貝塚寛平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編 2000 『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会 349p
- 5) 町田洋・新井房夫 1976 「広域に分布する火山灰- 姫良 Tn 火山灰の発見とその意義-」『科学』46 339-347p
- 6) 町田洋・新井房夫 2003 『新編火山灰アトラス』東京大学出版会 336p
- 7) 中村賀太郎・早川由紀夫・藤根 久・伊藤 茂・廣田正史・小林祐一 2008 「ウイグルマッチング法による棟名・渋川噴火の年代決定(再検討)」『日本第四紀学会講演要旨集』38 18-19p
- 8) 坂口 一 1993 「火山噴火の年代と季前の推定法」新井房夫編 『火山灰考古学』古今書院 151-172p
- 9) 早田 勉 1989 「六世紀における棟名火山の二回の噴火とその災害」『第四紀研究』27 297-312p
- 10) 友廣哲也 1988 「古式土師器出現期の様相と浅間山 C 軽石」『群馬の考古学(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団創立十周年記念論集』群馬県考古学資料普及会 325-336p
- 11) 矢口裕之 2011 「関東平野北西部 前橋堆積盆地の上部更新統から完新統にわたる諸問題」『(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』29 21-40p
- 12) 山崎晴雄 1978 「立川断層とその第四紀後期の運動」『第四紀研究』16 231-246p

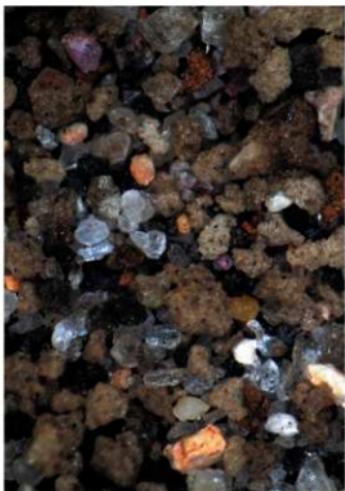
図版1 テフラ



1.As-Cの軽石( A地点;a )



2.砂分の状況( A地点;g )



3.As-Bの軽石( B地点;1 )



4.Hr-FPの軽石( B地点;9 )

1.0mm 1.0mm  
1.3 2.4

写 真 図 版

填  
丘  
調  
査  
前  
状  
況



填  
丘  
確  
認  
状  
況



填  
丘  
盛  
土  
状  
況



PL2



東側周溝  
完掘状況(西から)



東側周溝  
完掘状況(東から)

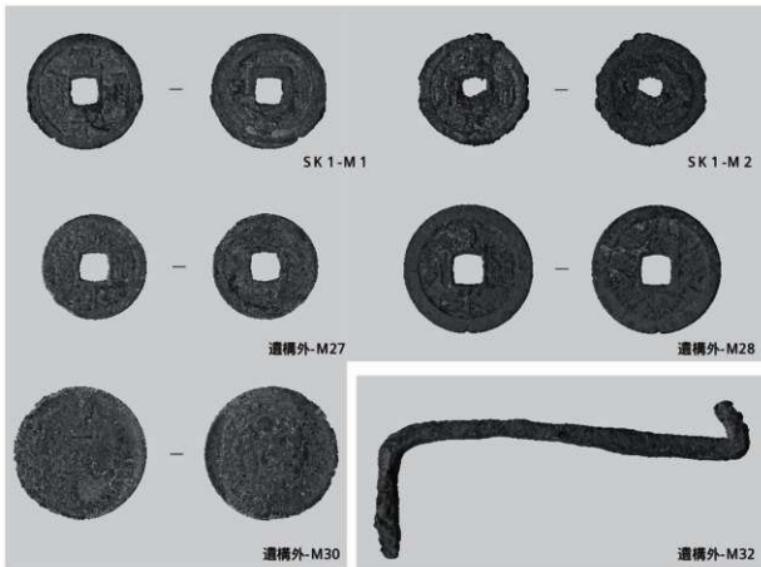


西側周溝  
完掘状況



第13号墳，第5号溝跡，遺構外出土土器

PL4



第1号土坑，遺構外出土遺物

抄 錄

## 印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 7  
Home Premium ServicePack1  
編集 A dobe InDesign CS6  
図版作成 A dobe Illustrator CS6  
写真調整 A dobe Photoshop CS6  
Scanning 6 × 7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000  
画面類 EPSON ES- 10000G  
使用Font OpenType リュウミンPro・L  
写 真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上  
印 刷 印刷所へは、A dobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第411集

### 仁江戸古墳群

主要地方道つくば古河線歩道新設  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28(2016)年 3月15日 印刷  
平成28(2016)年 3月18日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310- 0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029- 225- 6587  
HP <http://www.ibaraki-mabun.org>

印刷 (有)川田プリント

〒310- 0041 水戸市上水戸4丁目6- 53  
TEL 029- 253- 5551